

古川久編

「狂言辞典 語彙編」に寄せて

小山 弘 志

古川氏の長いこと地道に続けて来られた努力の結実である「狂言辞典 語彙編」が世に出た。お祝い申し上げるとともに、数次にわたる雑誌連載中からその恩恵に浴した者として、このように一本にまとめられてさらに多くの人々に利用されるようになったことを、まことに喜ばしいと思う。

「後記」によれば、この仕事に着手されたのが昭和十四年、その初稿が雑誌「謡曲界」に掲載されたのが昭和十七年という。実に二十余年の長きにわたる成果である。戦争をはさむこの二十年間に、狂言詞章の翻刻はいちじるしく増加した。また、狂言語彙研究のための参考文献も次第に増えて来ている。ことに、岩波文庫（大蔵虎寛本）・古本能狂言集（大蔵虎明本）のように良質なテキストが次々と翻刻・複製されたので、古川氏の仕事は、それらの新資料によつてたえず更新されなければならなかつた。資料

のほぼ出揃つた後に狂言研究をはじめた私どもの年代以後の者には、はかり知ることのできない苦労があつたと推察される。累次の雑誌掲載中にも、またこのたびの単行本になつた形にも、増補・補訂が重ねられており、その努力の跡をありありと見ることができる。

本書は、申すまでもなく、狂言語彙の集成であるが、同時にそれは幾多の参考資料より採集された類例の並記によつて、中世より近世初頭にかけての語彙集という面も持つている。狂言の性質上、それは口語であり、単語ばかりでなく短句・成句を豊富に含むこの集成は、類書を持たぬ貴重なものである。

従来とても狂言語彙は、「大日本国語辞典」「大言海」などに収録されている。ただ、それは多くの狂言テキストの中の一つである版本「狂言記」に拠つたもので、狂言語彙を尽くしたもので

はない。また近時、古川氏の提供により、「広辞苑」にかなりの語句が収録されたが、文例には狂言曲名を記すのみであるから、例えば「末広がり」と記されていても、それがどのテキストの「末広がり」の文例であるかを知ることができなかった。

狂言詞章は近世初期から数々のものが遺されており、流儀の別などもあつて多様な姿を示している。ある語句が狂言に存するといつても、どのテキストにもその語句があるとは限らない。したがつて、狂言の文例には曲名とともにテキスト名の註記が必要なのである。口頭で伝承されて来ている狂言の場合、諸本の書写年代や伝承経路に注意しなければ、その用語の時代を軽々に定めることはできない。文例に一々テキスト名をも註記してあり、語彙の出典を明確に知り得る本書の刊行によつて、私どもは安心して中世及び近世初期の文芸の解釈その他に、狂言語彙を利用できるようになつたのである。

本書の語釈は簡潔である。これがいかに困難なことであるかは知る人ぞ知る。狂言のことばには、それが当代口語であるために類例を他に求めにくくて難解なものもあり、またそれが現行口語と深い関連を持つがゆえに語義をうまく書きあらわしにくいものもある。編者多年の研鑽は数々の難語の解釈を定めた。それらをさりげなくちりばめながら、全体に極めて言葉少なにしかも適確に

語釈が施されている。かつて狂言の註釈をして非力を痛感した私は、それだけに編者の苦心が身にしみてわかるような気がする。

この稿は書評ではない。編者のなみなみならぬ努力の結果に対して、全文を読みもしないで批評したくないからである。ただ、古川氏は雑誌掲載中から繰返し、何か気づくことがあつたと言われていた。本書の「後記」にも同じことが記されている。それに、各項を一応独立したものとして扱うことも可能な「辞典」であるから、少しばかり読んだ程度で気づいたことを述べてみよう。

前に述べたように、狂言の諸本は書写年代にかなり幅がある。また、それらが翻刻された時期や翻刻態度にも差違があり、概して言えば、年代が進むにつれて比較的良質の本文の翻刻・複製が多くなり、またその翻刻態度も原本に忠実になつて来ている。研究の進展に伴うことから当然であろう。狂言の語彙・文例の採択において、これらの点は顧慮されるべきだと考えるが、本書はその配慮がやや薄く、諸本がほぼ同格に扱われているように感ぜられる。

例えば「駈け出し(かけだし)」の語を昭和五年刊「狂言選集」の「祢宜山伏」より採録しているが、この語は「駈け出で」(かけいで)「または「駈け出(かけで)」として諸本に見えるのが通例であり(もとより、両形とも、本書に項目として取られてい

る)、「駄け出し」の形は異例である。異例であるゆえに採られたのであろうが、もしかすると、原本に漢字で記されていたのを校訂者が送り仮名「し」を加えて読んだものかも知れないのである。

また、「早歌(そうが)」の語を挙げ、宴曲の別称の意とし、昭和三年刊「狂言篇」の「舟ふな」より「いや／＼これは猿丸太夫の早歌ぢやよ」を用例としている。しかし、これは現行大蔵流では、「はやうた」と言っており、版本「狂言記」にも「はや哥」とあり、「はやうた」である可能性が強い(本書は「はやうた」の項を欠く)。これらの場合、資料の選択・取捨がいささか当を得ないのではあるまいか。各語句における用例の採用も、必ずしも良質な古本を優先しているようには見受けられない。

これに関連して、採用諸本の翻刻刊行年代は「狂言概説」に記されているけれども、その原本の成立年代・書写者について説くことの少ないのは、周到に編纂された本書においていささか欠けた点かとも思われる。狂言のことは、どのテキストにそれがあるかかなり重要なことなので、語彙採収の対象とした諸本を、簡単な解題を添えてリストにして掲げていただきたかった。

歌謡の取扱について。すで池田広司氏も言われているように

〔能楽思潮〕25——昭和三十八年七月刊〕、語彙辞典の中に歌謡

を採録するのはやや無理があるようである。対象とされた狂言諸本の中に歌謡本文の記されている場合のみを採録されたためか、例えば「七つになる子」のように著名なものが項目として見出されない。それでいて、この歌謡の中の語「踊人(おどりど)」が「狂言小舞謡」の中から採録されている。

唯しことばなどを採録していると、歌謡と境界が付にくくなつて来て、歌謡を項目に採るように踏み切られたのではあるまいかなどと、その事情はわかるような気もする。しかし、やはり項目は語句に限られた方がよかつた。そして、歌謡、また和歌・連歌・漢詩を辞典本文から切り離し、それぞれの索引をやめてその代りにこれらの一覧表を作り、出処を記すようにした方がすつきりすると思う(もとよりこれら歌謡和歌などに含まれている語句で必要なものは項目として採用する)。これもやつてみると処理しにくい場合が起りそうではあるが。

ついでに固有名詞の索引について。もとよりこれは便利には違いないが、辞典本文が五十音順なのであるから、いささか重複の感がある。知りたい語句についてまず索引を見るという必要はないのだから、これを人名・地名などに類別した方が、例えば人名一覧の役をも果し得て一層利用価値があるように思われる。

さて、しばしば機会があつたのに怠つていて、今になつてこん

なことを言うのは、私見の採否はともかくとして、「もう少し早く言つてはしかつた」と編者に言われそうであるが、「語釈」について一つ。「はんべん」を現在の「はんぺん」、すなわち魚肉をすりつぶして蒸した食品と解されたのはいかがであろう。「宗論」で、お斎（とき）の品々、麩（ふ）・牛蒡（ごぼう）その他精進料理の列举の中にこれが出て来るのだから、魚肉製はちと問題である。日葡辞書に（パジエス日仏辞典にも）「ハンベン」という豆腐料理の名が載っている。今の「はんぺん」よりもこの方が適当なように思う。

以上、はんのわずか拾い読みした程度で私見を述べた。お目にかかつて申し上げればよいようなことをも筆にした感があつて恐縮である。最後に、さきごろ本書のおかげを蒙つたことを記して

おきたい。「犬筑波」の秋の部に「よくにすましていくちをそすふ」という句がある。この「いくち」がよくわからなかつたのだが、本書によつて「アワタケやヤマドリタケなど食用菌の総称」という語義も存することを知つた。そうすると「よく煮すましてイクチをぞ吸ふ」となり、茸の入つた吸物を飲む意だとわかつたのである。これからもいろいろと教えていただけることであろう。編者の多年の蓄積による教示を感謝し、多くの人々によつてこれが活用されることを、切望する次第である。

Λ A 5 五四八頁 昭和三十八年四月二十五日

東京堂刊 定価三〇〇〇円V